

平成 27 年度「教育・研究図書有効活用プロジェクト」

# 事業報告書



## はじめに

日本科学協会の「教育・研究図書有効活用プロジェクト」は、平成 11 年度に立ち上げた国際交流プロジェクトで、中国の若者等を対象とした図書寄贈、「日本知識大会」、「笹川杯作文コンクール」、そして日本招聘、また日本の若者を対象とした「Panda 杯作文コンクール」と中国招聘など広範な事業展開により、日中相互理解の深化と友好交流の促進を図っている。

日中関係は依然として微妙な状況が続いているが、本プロジェクトは、両国関係者から多くの賛同と支援を得、日中民間交流を継続することにより、相互理解の促進を図ってきた。

図書寄贈事業については、日本国内で約 104,000（累計約 3,840,000）冊の図書を収集し、中国の図書寄贈対象大学等に合計 156,254 冊（累計 3,570,078）冊の図書を寄贈した。また、「笹川杯作文コンクール」については、日中情勢を考慮して中国語版「コンクール」の開催を見送り、日本語版「コンクール」のみの開催となったが、中国全国の 117 大学の日本語学習者等から 1,416 点の作品応募を得た。

さらに立上げ 2 年目となる「Panda 杯全日本青年作文コンクール」についても、積極的な周知活動を行い、昨年の 1.5 倍強となる 350 点余の作品応募を得た。

ここに、平成 27 年度「教育・研究図書有効活用プロジェクト」事業について取りまとめ、全般的な実施状況を報告する。

平成 28 年 3 月 31 日

公益財団法人日本科学協会  
業務部 国際交流チーム

## 目 次

1. 図書収集	3
2. 図書寄贈	5
3. 中国における打合せ・視察等の実施	5
4. 図書寄贈対象大学の追加	6
5. 「笹川杯全国大学日本知識大会」の開催	7
6. 「笹川杯作文コンクール」の開催	7
7. 「Panda 杯全日本青年作文コンクール」の開催	7
8. 「中国大学図書館担当者訪日交流」の実施	7
9. 「笹川杯全国大学日本知識大会・作分コンクール優勝者等日本招聘」の実施	8
10. 目標達成	8

## 1. 図書収集

### (1) 図書収集活動

良質な図書を効率的に収集するため、下記の方法により出版社や企業、大学・研究機関、公共図書館、個人等に協力を呼びかけた。

	供依頼	活動内容		
		時期	方法	件数
1	出版社への依頼	8月	文書	283
2	出版社への依頼	2月	文書	279
3	専門図書館協議会関東地区協議会への依頼	9月、2月	FAX、e-mail、HP掲載	276
4	全国の国公立大学図書館への依頼	8月、1月	e-mail	114
5	東日本の私立大学図書館への依頼	8月、1月	e-mail	188
6	首都圏（1都3県）の地域図書館への依頼	8月、1月	e-mail	97
7	朝日新聞掲載記事による呼びかけ（別添1）	9月28日	記事掲載	
8	当協会 web サイト・ブログによる呼びかけ	通年	告知	
9	既・新規提供者への依頼	通年	訪問、電話、e-mail	

### (2) 図書収集実績

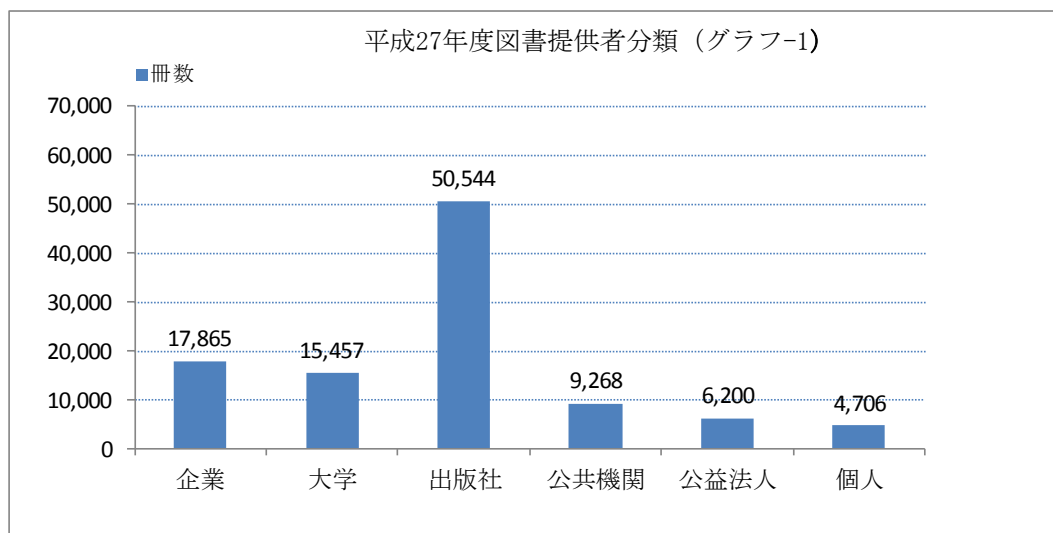
104,040冊（提供件数：延べ337件）

前記（1）の通り積極的な収集活動を行った結果、多方面からの協力が得られ、104,040冊の図書を収集した。このうち、新刊図書或いは新刊図書と同等な図書は51,368冊である。（出版社提供：50,544冊、その他の提供：824冊）

なお、提供者別提供冊数・提供者数は、表-1、グラフ-1のとおりである。

区分	冊数（A）	（A）の全体に占める割合	提供者数（B）	（B）の全体に占める割合
企業	17,865	17.2%	129	38.3%
大学	15,457	14.9%	27	8.0%
出版社	50,544	48.6%	50	14.8%
公共機関	9,268	8.9%	25	7.4%
公益法人	6,200	6.0%	53	15.7%
個人	4,706	4.5%	53	15.7%
合計	104,040	100%	337	100%

※提供者数は、延べ件数である。



【参考】

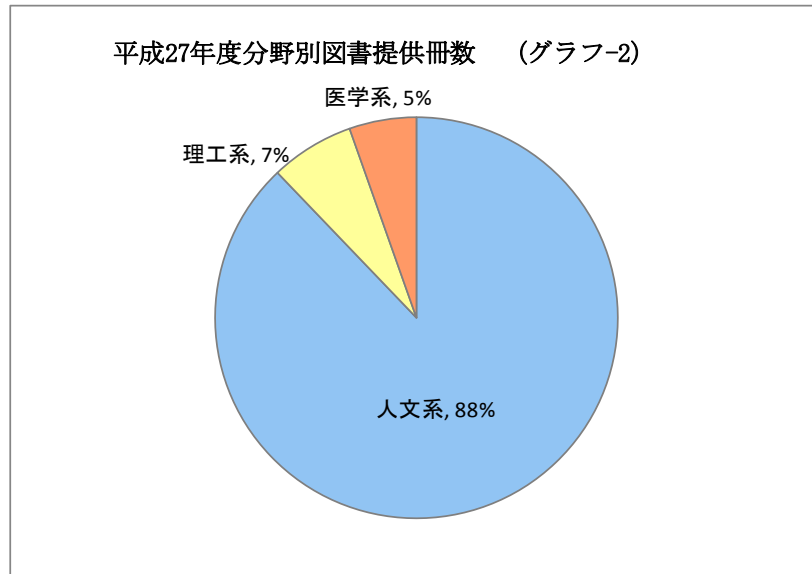
- ・平成27年度図書提供者一覧表（別添1）
- ・平成27年度図書収集実績表（104,040冊）（別添2）

(3) 収集図書分野

収集図書104,040冊の分野別収集冊数・提供者数は、表-2及びグラフ-2のとおりである。人文系が91,421冊（88%）、理工系が7,012冊（7%）、医学系が5,607冊（5%）であり、分野によって大きな偏りが見られた。これは、寄贈図書に対する中国側の受入れ基準の高さにも分野によって偏りがあるためである。特に、技術の進歩が急速な理工系、医学系の図書については、受入れ基準が非常に高い（ここ5年以内の出版）ため、中国側のニーズに沿った図書の収集が困難であり、結果的に両分野の図書の収集冊数はごく少ないものとなった。他方、受入れ基準が比較的緩やかな人文系図書については、収集が比較的容易であり、収集図書の大半を占める結果となった。

平成27年度分野別提供冊数・提供者数（表-2）

区分	冊数（A）	（A）の全体に占める割合	提供者数（B）	（B）の全体に占める割合
人文系	91,421	88%	235	69.7%
理工系	7,012	7%	82	24.3%
医学系	5,607	5%	20	5.9%
合計	104,040	100%	337	100%
※提供者数は、延べ人数である。				



#### (4) 収集図書の活用率向上

収集図書の活用率（寄贈可能図書数/収集図書数）の向上を図るため、図書提供者の協力を求め、次のような方法で図書を収集した。

- ① 図書の提供冊数が多い場合、事前に提供者の了解を得、現場において実物を確認しながら中国への寄贈の適・不適を判断基準に選択して収集した。
- ② 提供図書に関する既存のリストがある場合、提供者から事前に入手し、中国への寄贈の適・不適を判断基準にリスト上で選択して収集した。
- ③ 主に個人提供者に対しては、寄贈対象図書の基準（内容、発行年、外観等）を説明し、これに沿った図書の提供を依頼して収集した。

## 2. 図書寄贈

### (1) 寄贈実績

本プロジェクトが策定した図書寄贈方針に基づき収集図書を寄贈先毎に選定し、各寄贈先と調整のうえ図書寄贈計画書を策定し、別添3のとおり送付した。

- ・ 寄贈冊数合計：156,254 冊
- ・ 寄贈回数合計：8 回
  - ・ 2015年6月(2回)、7月(1回)、11月(1回)、12月(2回)
  - ・ 2016年3月(2回)

## 3. 中国における打合せ・視察等の実施

次の通り、中国においてヒアリング、打合、視察等を実施した。

時期	場 所	内 容
2015年5月	上海交通大学(上海市)	図書寄贈業務管理ソフトに関する打合せ等
2015年9月	中国青年報社(北京市)	「笹川杯作文コンクール」関係打合せ
	吉林大学(長春市)	「笹川杯全国大学日本知識大会2015」関係打合せ
	東北師範大学(長春市) 東北師範大学人文学院(長春市)	寄贈対象大学の追加に係る現地調査等
2015年10月	中国人民大学(北京市)	寄贈対象大学の追加に係る現地調査等
	広西師範大学(桂林市) 雲南大学(昆明市)	寄贈図書の活用状況に関する現地調査等
2015年11月	上海交通大学(上海市)	図書寄贈業務管理ソフトに関する打合せ等
2015年12月	中国人民大学(北京市)	寄贈対象大学の追加に係る現地調査等

#### 4. 図書寄贈対象大学の追加

- (1) 覚書締結期日：2015年4月1日(2大学)、5月26日(1大学)、11月1日(3大学)、12月1日(1大学)
- (2) 内 容：本プロジェクトの広範な浸透に伴って高まっている中国側の図書寄贈への要望に応えるとともに  
収集図書の活用率向上、寄贈の裾野拡張を図るため、追加候補に対する現地調査を実施して次  
の7大学を寄贈対象に追加するとともに、各大学との間で図書寄贈に関する覚書を締結した。
- (3) 追加大学：2大学(井岡山大学、武漢大学)
  - 1大学(東北大学秦皇島分校)
  - 3大学(東北師範大学、東北師範大学人文学院、吉林大学珠海校)
  - 1大学(中国人民大学)

#### 5. 「笹川杯全国大学日本知識大会」の開催

- (1) 開催日：2015年11月14日(予選)、15日(決勝戦)
- (2) 場 所：吉林大学 中心校区「東栄会議中心」
- (3) 参加者：参加94大学(選手各3名/合計282名)
- (4) 列席者：約450名
- (5) 内 容：中国の若者の対日理解・関心の深化、寄贈図書の活用促進、日本語教育の振興を図るため、  
中国の大学の日本語学習者を対象として、日本知識と日本語能力を全国規模で検証する機会と  
なる「大会」を開催した。
- (6) 結 果：・団体戦
  - 特等賞 武漢大学、
  - 一等賞 南京工業大学、吉林大学
  - 二等賞 海南大学、東北電力大学、西南民族大学、江越秀外国语学院、  
中南财经政法大学、安徽师范大学

※副賞として、日本招聘。

  - ・個人戦
    - 優勝 1名、二等 2名、三等 3名

※副賞として、日本招聘（団体戦との重複あり）

## 6. 「笹川杯作文コンクール」の開催

- (1) 実施機関：人民中国雑誌社（作文の募集、審査、広報等）
- (2) テーマ：「民間交流と中日関係」、「アジアの未来と中日関係」
- (3) 募集期間：2015年5月1日～2015年10月31日
- (4) 内 容：中国の若者の対日関心の喚起と対日理解の促進を図るため、当協会と人民中国雑誌社の共催により、中国全土の青年層を対象に日本をテーマとする日本語版の「作文コンクール」を開催した。  
なお、中国青年報社と共催する中国語版の「作文コンクール」については、日中情勢を考慮して本年度の開催を中止した。
- (5) 応募総数：1,416点
- (6) 審査結果：優勝2点（副賞：日本招聘）、二等賞2点、三等賞4点、優秀賞10点

## 7. 「Panda杯全日本青年作文コンクール」の開催

- (1) コンクールの開催
  - ①実施機関：人民中国雑誌社（作文の募集、審査、広報等）
  - ②テーマ：「隣人『中国』とわたし」
  - ③募集期間：2015年6月1日～2015年9月25日
  - ④内 容：日本の若者の対中関心の喚起と対中理解の促進を図るため、当協会、人民中国雑誌社、中国大使館の三者共催により、日本の若者を対象に“中国”をテーマとする日本語による作文コンクールを開催した。
  - ⑤応募総数：354点
  - ⑥審査結果：優秀賞10点、入選5点、佳作30点
- (2) 中国訪問プログラムの実施
  - ①実施時期：2015年12月19日～2015年12月25日（7日間）
  - ②場 所：北京市、曲阜市
  - ③招聘者：優秀賞、入選受賞者等17名
  - ④内 容：日中相互理解の深化と友好交流の促進を図るため、「コンクール」優秀賞、入選受賞者等を中国に派遣し、中国の大学生との討論会を始めとした人的交流、文化体験、訪問見学、中国外文局での授賞式など広範なプログラムを実施した。

## 8. 「中国大学図書館担当者訪日交流」の実施

- (1) 実施時期：2015年6月28日～2015年7月5日（8日間）
- (2) 場 所：東京都、宮城県、北海道
- (3) 招聘者等：合計35名
  - ・図書寄贈対象大学の図書館担当者等 33名
  - ・図書寄贈に係る中継機関担当者 2名



(4) 内 容：日本の図書事情、文化、社会等に対する理解の深化、日中の図書館関係者の情報交換の促進を図るため、中国の図書寄贈先の図書館担当者等を招聘し、「日中大学図書館フォーラム」の開催、大学図書館見学、図書館関係者との情報交換、東日本大震災の被災地訪問などのプログラムを実施した。

## 9. 「笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール優勝者等日本招聘」の実施

(1) 実施時期：2016年3月1日～2016年3月8日（8日間）

(2) 場 所：東京都、神奈川県、静岡県、滋賀府、京都府、大阪府

(3) 招聘者： 合計33名

・「知識大会」関係者 30名（学生 28名、引率者 2名）

・「作文コンクール」関係者 3名（受賞者 2名、引率者 1名）

(4) 同行者：3名

(5) 内 容： 日中相互理解の深化と友好交流の促進を図るため、「日本知識大会」優勝者等と「作文コンクール」優勝者等を招聘し、日本の若者・地域住民等との交流、福祉施設、文化遺産、名所旧跡等の訪問見学など広範なプログラムを実施した。

## 10. 事業目標の達成状況

### (1) 図書の収集

日本の出版社、各種図書館、出版社、企業、個人など各方面に対して様々な方法で図書提供を依頼により、約 104,040 冊の図書を収集した。これらの図書提供者数は 128 者、延べ 337 件であるが、このうち 44 件は運送料まで含めた図書提供であり、本プロジェクトに対する広範な理解と協力を得ることができた。また、これらの提供者に所蔵図書の有効活用、国際貢献の機会を提供することができた。

しかし、収集量という点では、前年度実績（約 171,000 冊/378 件）の約 6 割という結果となった。これは、大量提供の減少、収集図書の厳選化など提供者側と当協会側の双方の理由によるが、今後は提供依頼活動を更に強化していく必要がある。

### (2) 図書の寄贈

日中関係は、依然として微妙な状況にあるが、本プロジェクトの寄贈図書に対する中国側の要望は強く、合計 156,254 冊の図書をニーズに応じて寄贈することにより、日本理解の深化、日本語学習の振興、日本文化の伝播に寄与した。

中国の各寄贈先は、受贈にあたって 1 冊あたり約 4.5 元（日本円：約 78 円）の手数料を支払っているが、本年度の寄贈図書（合計 156,254 冊）に対して各大学等が支払った手数料の総額は、日本円に換算すると約 12,190,000 円になる。これは日中交流事業としての当プロジェクトに対する中国側の評価の高さを裏付けるものである。

質の面においては、中国側の図書活用者や図書館担当者からの声を積極的に収集するとともに連絡・調整を密にすることにより、寄贈図書に対する日中間の認識共有を図った。さらに、当会が“贈りたい図書”、また中国側が“贈られたい図書”の積極的な収集という観点から、出版社などに積極的な働きかけを行った結果、要望に沿った図書の寄贈が図られた。

※図書収集合計に占める出版社提供図書の割合：（平成 27 年度：約 49%）。

国際交流基金の2012年版調査によると、海外の大学の日本語教育上の最も深刻な問題は、「教材不足」や「情報不足」であるが、当プロジェクトの寄贈図書は、こうした問題解決の一助となるものである。

### (3) 「笹川杯全国大学日本知識大会」の開催

中国全土の日本語設置大学（506大学）の約1/5強に当たる94大学（選手：約282名）が参加により開催された本大会は、中国の大学の日本語教育史にも残るイベントであると同時に、参加選手にとっては、日本知識と日本語能力を全国規模で検証する貴重な機会であり、本大会の認知度の向上、日本語学習者のモチベーション・アップに繋がった。

また、本大会は、朝日新聞、TBS、人民日報、新華社、中国国際放送局、中国青年報社、人民中国雑誌社を始めとした多くのマスメディアを通じて広範な報道がなされ、日中民間交流の意義を印象付けた。

### (4) 「笹川杯作文コンクール」の開催

日中情勢が交流事業に少なからぬ影響を及ぼす中、日本語版の「作文コンクール」を開催し、中国全国117大学の日本語学習者等から1,416点の応募を得た。また、作文の募集、優秀作品の公開は、日本語学習のモチベーション・アップに繋がった。

中国語版の「作文コンクール」については、共催機関の中国青年報社と開催に向けた協議を重ねたものの、日中情勢を考慮して開催見送りとなった。しかし、同社とは、日中緊張状態における民間交流の意義を共有し、来年度以降の「コンクール」再開、協力関係の継続等について協議してきた。

### (5) 「Panda杯全日本青年作文コンクール」の開催

事業開始から2年目となる本年度は、facebookの立ち上げ、イベントの開催、協力者の開拓など応募呼びかけのための活動を積極的に行い、「コンクール」に対する関心喚起、理解促進を図り、前年度の1.5倍強となる354点の応募を得た。また、優秀作品については、日本語の原版のみならず中国語の翻訳版をSNSを通じて中国国内外に広く発信し、非常に高いアクセス数を獲得するなど、中国人の日本に対する関心喚起と理解促進に繋がったと期待できる。

さらに、優秀賞受賞者等を対象に実施した中国訪問プログラムは、日本の若者の中国への理解や友好の深化に繋がったのみならず、中国の若者、指導層など広範な人々の日本への理解と友好の深化にも繋がった。さらに、この訪中プログラムは、TBSテレビの特集報道のほか、毎日新聞、人民日報、新華社、中国国際放送局、中国青年報など多くのマスメディアを通じて広範に報道され、日中民間交流の意義を印象付けると同時に日本財団、日本科学協会の認知度を向上させるものとなった。

### (6) 「中国大学図書館担当者訪日交流」の実施

「日中大学図書館フォーラム」の開催、図書館見学、東日本大震災被災地訪問、意見交換等を通じて、日中の大学図書館間の情報交換、中国の図書館担当者の資質向上、日本の現状に対する多角的な理解が促進された。また、中国の各寄贈対象大学の図書館担当者相互のネットワークが強化された。

### (7) 「笹川杯全国大学日本知識大会・作文コンクール優勝者日本招聘」の実施

本年度は、中国が抱えている深刻な問題（福祉問題、環境問題、世界平和等）にスポットをあて、「社会福祉法人富岳会」、「針江生水の郷」、「立命館大学国際平和ミュージアム」などを見学し、これらの問題に対するそれぞれの取組み・考え方を紹介することで、中国の若者の日本に対する多面的な理解が図られた。また、日本の若者や訪問先関係者など広範な日本人との直接交流は、中国の若者にとって、対日理解や友好を深める機会となった。さらに、中国の若者との直接交流は、広範な日本人とっても、対中理解や友好を深める機会となった。

### (8) 情報発信

当プロジェクトの各事業に関する様々な情報を、当協会 web サイト・ブログ、小冊子等を通じて随時情報発信することで、プロジェクトへの理解、日中間の相互理解の促進に繋がった。

(9) 広報活動

「日本知識大会」、「日本知識大会・作文コンクール」日本招聘、「Panda 杯作文コンクール」中国招聘の実施にあたっては、日中両国の報道関係各社へのプレスリリース、報道関係者への取材依頼を行い、TBS、毎日新聞、朝日新聞、人民日報、新華社、中国国際放送局、中国青年報社、人民中国雑誌社を始めとした多くのマスメディアによる広範な報道に繋がった。これにより民間交流の意義を社会に広く印象付けると同時に日本財団、当協会の認知向上が図られた。